

【『琅』四十号・あとがき】

日本語が聞き取れない、まるで外国語を聞いているようだ・・・こんな思いを実感するようになって、何年になるだろう。はじめは、通勤電車の中で耳にする若者たち、取り分け女子高校生の話し言葉だったと思う。世代の違いがある上に男女の違いも加われば、理解出来ないのは当然と思いつつも、これも社会分断の一面ではないかと思う。

「見れる・食べれる・来れる」などの「ら抜き言葉」は、最早それを問題にする方が少数派のようである。テレビに出るタレントは言うに及ばず、親も教員も、こうした表現を不自然とは思わないで使っている時代なので、学校教育の中では、早晩、助動詞の活用について指導の見直しが必要になるのではないか。

「速っ・すごっ」といった形容詞の促音便(?)表現も、ときにNHKのアナウンサーも使う時代だから、そのうち耳も慣れるだろう。

テレビの旅番組を見ていたときのことである。案内役のタレントが、行く先々で「メッチャきれい」「メッチャ美味い」と連発するので、さすがの私もキレて、「もう少し違う言い方はないのか!？」と、テレビに向かって「ぼやうしところ、すかさずタレントは「メッチャメチャ、ジューシュー」と来たので、こちらとしては、チョーメッチャメチャ頭が真っ白になったのである。

最近よく利用するスーパー・マーケットにはテーマソング(コンセプトソングと言うらしい)があり、たえず店内に流れているのだが、その歌詞が聞き取れない。買い物物の邪魔にならないように、音量を制限しているということもあるが、よく聞き取れるような状況でも、何語の歌なのかさえ分からない。所々に、日本語らしき言葉も聞こえるが、最近の流行歌の例に倣い、急に裏声になったり、日本語としてのつながりやイントネーションを無視した曲想に

なっていたりするため、意味が把握できないのである。ネットで検索して、歌詞の前半は日本語、後半は英語だということ、また、歌い手は若い人たちには馴染みの女性シンガーだということが分かった。

その後、スーパーに行く機会があり、多少理解出来る部分は増えたように思ったが、それは、字幕スーパーの映画を見ているときのような感じだった。つまり、字幕がなければ英語はほとんど聞き取れないが、字幕があると、多少英語を追うことが出来る、それと同じである。そういうことが、外国語ではなく日本語でおきているのである。

カーラジオで国会中継を聞いていて、さらに日本語が分からなくなつたと思つた。「感染爆発となつても五輪はやるのか?」の質問に、首相は、傷ついたレコードのように「古いたとえだ!」、「感染対策を講じ・・・国民の命と健康を守る」を何度も繰り返していたのである。

はじめ、質問を聞き返されたかと思つたが、同じようなやり取りが繰り返されたのは、質問者も、答弁が質問に対する真つ当な答えになつていないと感じたからだろう。こうしたはぐらかすような受け答えを聞くようになって久しいが、我が国ではそれは当てはまらないようだ。

最近では、言葉によつて踊らされることがない我が国の状況は、喜ぶべきことなのだと思うようにしている。

(茂治)

(次号原稿締め切り日)

二〇二二年九月末日

『琅』四十号 二〇二一年五月 発行
 編集・発行人 松村 茂治
 発行所 252-0143 神奈川県相模原市緑区橋本5-26-19
 「琅の会」・ 瓦 (〇四二二七七三―五九二七)